

シリーズー薬剤師の新たな関わり方 その4

今後の医療を見据えて

調剤薬局が病院薬剤師に望むこと

日本薬剤師会

会長 山本 信夫

●病院薬剤師と開局薬剤師の関係●

日本薬剤師会の会長の山本でございます。今日は、病院薬剤師の方々のための放送にお招きをいただきましてありがとうございます。いただいたテーマが「今後の医療を見据えて調剤薬局が病院薬剤師に望むこと」というテーマでありますので、開局薬剤師の立場からそうした視点でお話をしたいと思います。

まず、いただいたテーマでありますけれども、私は多少こだわりがありまして、薬局ないし保険薬局といわれることについてはあまり抵抗がないのでありますが、調剤薬局という呼称にはたいへん抵抗感を持っておりますので、調剤薬局という言葉はもう二度と出てきませんけれども、そういう本人の思いというふうに思ってお聴き願えればと思います。

これまで、病院薬剤師と開局薬剤師という関係を振り返ってみますと、処方せんが院外処方せんとして外来の患者さんに対して当然のように交付され始めたのはそう古いことではなしに、昭和49年、1974年に国が大きな方針転換をし、それまで院内での医療完結をしていたものを、外来患者については様々な要因から院外処方せんを使って地域にある薬局を活用しようということでスタートしたのでありますが、実は処方せん自体はもともと古く、私の記憶ではそれよりずっと前の、70年、80年前から一部の医療機関では発行され続けていました。そういった意味でいえば新しい話ではないのですが、多くの薬剤師、開局の薬剤師が病院・診療所の処方せんを受け付けるようになるのは昭和49年以降になります。

そのときに患者がどういう感じであったかという、今回のテーマであります、町の薬局が、保険薬局が病院薬剤師に望むといったこと以前に、病院薬剤師と開局薬剤師とは何となく上下の関係があるような、あるいはただ近いところにいるような、あるいは病院薬剤師の方々から見ればお客様であるような、反対に開局薬剤師から見ると先生であるような、言ってみれば医療機関と薬局との意識的な距離感の関係もあり、当時を振り返ってみると、病院

薬剤師と開局薬剤師という分け方をしたり、院内薬剤師と試してみたり、様々な言い方をされましたけれど、両者を同様に薬剤師と呼ぶことがあまりなかったというのが私の記憶にあります。なぜそんな感想を持ったかという、私は昭和49年に薬剤師になりましたので、それから分業が進展するなか、病院薬剤師の方々と様々な場面で出くわしお付き合いをしてきたわけではありますが、なんとなく当初はそういう感じを持っていました。

最近ではそうしたこともなく、薬薬連携あるいは医薬連携といった形で地域の薬局と病院の薬剤師の方々との連携がたいへん進んでおりますし、風通しもよくなってきているはずですので、そういった意味ではずいぶんと時代が変わったという感じがします。

そのうえで、さらにそうしたものに拍車をかけるように人口の高齢化が進んでおり、戦後のベビーブームの年に生まれた子供たちがすべて75歳を超える年が2025年といわれています。戦後、昭和22、23、24、25年までに生まれた世代をベビーブーム世代とか団塊の世代と呼ばれますが、そうした世代は、たいへん日本の人口分布の中では、人口がでは多いところでもあります。加えて、まだなお皆さん元気で働いておりますので、そういった意味では確かに予測のとおり2025年になると、かなりの数の75歳以上の高齢者が増えます。

●地域完結型医療における病院薬剤師と開局薬剤師の連携●

そうしたなかで一体国はそれにどう対応していくかということが大きな問題ですが、日本の社会保障制度を考えてみると、これまでのように働いている者が保険料として拠出金をし、国から一部財政的な援助を得ながらお年寄りの方々の面倒を見ていく。いずれ自分たちが年を取ったら、さらに若い者たちがそうしたファンドを継続することによって社会保障の恩恵を受けるという仕組みを作っているわけではありますが、高齢者が増え、勤労世代が減るということは全体の社会保障費そのものが大きな影響を受けます。そのことについて国ではどうするかというと、放っておけばお年寄りがたいへん困ってしまいますし、同時に若人も困るわけですので、これまでの考え方を少し変えまして、2025年には地域包括ケアシステムという新しい概念を提唱しています。

これは有り体に言えば、病院完結型で進んできた日本の医療提供体制を地域完結型に変えていこうという、大きな視点の変化ととらえてもいいと思います。そして、地域医療提供体制も、地域の概念は小中学校区と想定されていて、その圏内で様々な医療サービスが提供できるように地域の医療関係者が連携をしていくことが期待されています。また、高齢化が進めば必ず医療だけではなくに介護の必要性も同時にやってきますので、介護との適切な連携も考慮しなくてはなりません。さらにいえば、多くの患者調査の結果によれば、誰もが住み慣れた場所で最期を迎えたいという思いが強くある反面で、様々な理由で入院をしなくてはならないというケースもありますので、そうした社会的基盤も考えながら、高齢となっても地域のなかでできるだけ介護を受けずに済むように、地域社会全体で高齢者の生活支援が可能な体制を構築しつつ、介護分野と医療分野とが効果的に連携をして、医療と介護の専門職がその地域の特性を踏まえたチームを組んで地域住民のニーズに対応する仕組みというふうに考えればよいのではないかと思います。

医療機関に勤務する薬剤師の方々にとってみれば、医療チームを組むということは決して難しいことではないのかもしれませんが。いつも同じ施設のなかに医師あるいは看護師、あるいは場合によっては歯科医師、その他治療に関連する栄養士や、あるいはOT/PTの方々等、いわゆる医療スタッフの方々が常に同時に存在をしていますので、顔見知りでもありませんし、医師と共にチームのなかに薬剤師、看護師が入って同時に仕事をするというケースも最近増えていると聞いています。また、診療報酬上も薬剤師の病棟配置とその業務についての評価がされ、病棟へ行って患者さんに直接服薬指導をするという従来の業務に加えて、その病棟に留まって医薬品等に関連する多職種からの相談を受け、アドバイスをするなど、これまで以上に業務が拡大してきていますので、医療チームを組むことは開局薬剤師に比べると容易なのではないかと思えます。その反面、外来患者に対する地域での医療チームを考えてみますと、どんな仕組みができていくかという、医療機関内でのような職種間連携ではなしに、むしろ機関間と言ったら良いのでしょうか、地域では病院、診療所あるいは訪問看護ステーション、歯科診療所と薬局という組み合わせになりますので、それぞれが独自の仕事をしている機関同士が、さあ地域包括になった、どうチームを組んでいくかということになりますから、思いの外容易なことではありません。

それを、いま国はもとより日本薬剤師会・都道府県薬剤師会もそうした方向に向かって、地域の患者さんをケアするための仕事をしていくことが大きな課題であります。その際に、元々地域の診療所にかかっていた方々は、これまで通り地域のなかでなんとか対応ができていたと思いますが、それまで元気でいた方が体調を壊して地域の診療所にかかった、その後、外来で診療を続けていたけれども、病状の変化に伴って入院をするというケースが来た場合を考えて見ましょう。入院中は、先ほど申しましたようにチーム医療が進められていますので、いつも様々な職種が患者さんの前にやって来る。そして、一定程度回復すると地域に戻るわけですが、退院したのち患者自身がで外来患者として地域に戻る場合もありましょうし、残念ながらお元気ではありませんけれども容易に一人では外出できないという患者さんも出てきて、在宅での療養を余儀なくされる患者さんが増えることも想像されます。高齢化が進めば、そうでなくてもお年寄りになってご不自由な部分があるところに、併せていくつかの疾病を持っているわけですから、そう簡単にはご自分で病院や診療所に行くことができない状況になることは容易に想定できます。そんななかで地域の薬剤師が訪問薬剤管理指導という形で患者さんのお宅を訪ねていろいろ仕事をするわけですが、そうしたときに机上で考えるほどスムーズに各職種間の連携が取りにくい場合があります。ですから、外来から入院を経て地域にという患者の流れのなかで、薬剤師の活動はどこにあるかという、地域のなかでだけ活動することも不合理ですし、病院だけがしっかりしていても患者さんとしてはあまりハッピーではないでしょう。ならば、1人の患者さんにチームで対応してきた医療機関の医療関係者の方々が、ではこの患者さんについてはどんな形で地域で面倒を見てもらえればいいのかというような連携が必ず大きな課題になるはずで、その際に医師と地域の薬剤師という連携はたいへん難しいことですが、同じ薬剤師という関係であれば、そこでは薬剤師が関わる情報、あるいは薬物治療に関する情報に

合わせて、入院中に起きた療養上の問題点も十分に連携も可能ですし、情報の把握も迅速にできます。

いってみれば、アメリカの大統領が交代するとスタッフ全部が交代しますが、必ず移行期間があってある時期が来ると次の大統領に代わるのと同じように、入院患者さんに対して様々な医療職種がケアしてきたことを、そのチームから次のチームへバトンタッチをする。そのときに薬剤師に対しては薬剤師の方々が、薬剤師として薬はどうであったかというようなことを提供していただけるような態勢が組めれば、これは極めて円滑な地域連携ができるし、チーム医療が医療機関のなかからそのまま地域へ移行できれば、地域のなかで極めて効率的なチーム医療が提供できる体制がくめるという思いがいたします。

そういった意味で、地域医療を効果的に進めていくというなかで、我々があえてお願いしたいとすれば、まさにこれまでの数十年前にあったような病院と診療所、あるいは病院と地域の薬剤師というような壁を取っ払って、薬剤師としてこの患者さんをどう面倒見るか。たまたまその面倒を見る相手が医療機関のなかにいた薬剤師か、あるいは地域にいた薬剤師かという違いだけで、薬剤師の視点は常に患者に向けられて、そのために必要な情報が薬剤師の情報、あるいは医療情報でも結構ですけれども、その必要な情報を地域の薬剤師がその患者さんに対して、薬物治療を継続するうえで不可欠な情報を効果的に伝えていただくというような共通の言葉が必要なのではないかと。そのときにあまり難しい言葉ではなしに薬剤師同士わかり合える言葉を使って、その患者の情報を伝える。こうした情報の共有のための仕組みの構築が地域の薬剤師としては、医療機関に働く薬剤師の方々に望むところであります。